

## 釧路空襲体験談

武市 ユキエ

昭和二十年七月十四日、晴れた朝でした。五時頃海の沖の方で「ドカン、ドカン」という音がして、今日はお天気が良いのに朝から雷が鳴っているなと思っておりました。お隣の奥さんも、今日は天気が良いのにダイコン畑に行くといって出かけていきました。

暫くしてから、不気味な音を立てて、変わった飛行機が編隊を組んで北西から南の方へ去って行きました。その後、「ドカン、ドカン、バリバリ」と大空襲が始まり、急いで防空壕に入り爆弾の落ちる音を聞いていました。ドカンと落ちる度に、ほっぺたの肉が引っぱられてちぎれそうでした。

お昼近くには静かになったので、皆で爆弾の落ちた跡を見に行きましたが、旭学校の横に大きな穴が出来ていました。

お昼すぎて二度目が大変でした。バラバラと雨かと思ったら、街中にガソリンがまかれて射撃されたので、あちらこちらで火の手が上がり、火のついたまま防空壕に走り込む人の姿も見えました。飛行機が降下してきた時に、一人しか乗っていないのがはっきり見えました。私は北大通側の黒金町七丁目におりましたが、まわりの街には火の手が上がり、駅前から、学校、病院、そしてお墓まで、とにかくエントツのある所は全滅でした。生きている心地はありませんでした。

十四日の夜、今度は三度目、街中が艦砲射撃をされるので早く早く街から出た方が良いとのニュースに、町内会はただひとり消防団の人が残っただけで、全員街を去りました。私達も、赤ちゃん、子供、お年寄り、体の悪い人など色々の人達で食料を背負って阿寒方面に向かいました。駅前の管理局は射撃され蜂の巣のように穴があき、駅裏に出た所では、消防団の人がバケツに水をくんで、街を去る人達にお水をコップに一杯ずつ飲ませてくれていました。近くには、ちょうどお産時にぶつかって、苦しみながら大騒ぎしている人もおりました。

私達がヒラトマイの空き家で一休みしておりますと、騎兵隊の人が「少しでも遠くに逃げなさい」といって自分達はどんどん馬にのって走っていました。私達は又歩きはじめました。今度は線路づたいに歩き、ユッパナイの知人宅に泊めてもらい、十五日も線路づたいに歩きました。飛行機が何回も通り過ぎる度に、林の中のやち坊主と一緒に隠れました。そのうちに広い道路に出てまた歩き阿寒町近くになると、熊部隊の馬車が鉄砲玉を海辺にはこんだ帰り道に、疎開する人達をひろっては乗せてきていました。部隊の人は、「道中に二人ぐらい落としてきた」と言っていましたが、皆な何日も飲まず食わずで寝ていなかつたので、落ちた方も落とされた方も気が付かなかつたのでしょう。疲れて道ばたで寝ている人もたくさんおりました。街を少しはなれた所で、列車が草むらで蜂の巣の様になって置き去りになっているのも見ました。

阿寒町についたのが十五日のお昼頃でした。どうした事か、私はぞうりをはいて街を出たのですが、そのぞうりが半分なくなっていてかかとのないものをはいておりました。次の日は体が痛くて起きられませんでした。

そのころはまだ二十才を過ぎたばかりでした。今はもう七十才を過ぎましたが、本当に生きのびてきてよかったです。見晴らしの良い住宅の四階に住まわせてもらって今日もがんばっております。